

「西鶴織留」をめぐる二、三の問題(二)

谷 脇 理 史

三、町人物三部作説をめぐって

前章において私は、「織留」の団水序後半部をとりあげ、そのいささか不明確な文体を問題にしつつ、団水序をそのままに受けとることへの疑問を投げかけて来た。そしてその疑問は、団水序前半部が文字通りに受けとられ、団水序の視点から「織留」が見られることによって行なわれているように思われる現在の評価や理解が果して正しいのか、という疑問へと、私自身の中で序々に増幅されて行くようである。

現在、忠実な弟子団水のイメージは、ほぼ確定している。そして、私も又、やや皮肉な見方からではあるが、第一章で論じたように、気鋭の団水が、師西鶴の作中に自分の作品をまぎれこませようとするはずがない、という視点から、その忠実度を一応確信してはいる。しかし、確実な推定は不可能であるにしても、書肆との何らかの軋轢の過程で書かれていると考えられるこの団水の序を見て行く時、師に忠実な団水の人柄

をいかに強調しても、前述のように、やはり納得しえない点があることも確かである。あるいは逆に、師に忠実であるが故に、何とか格好をつけようとする姿勢がそこにあるのではないか、という疑いも生まれてこない訳ではない。とりわけ、「織留」を「永代蔵」と並列し、それを「商職人の関するに、日用世をわたるたつきにこころを得べき龜鑑たるべきもの」と権威づけようとする序の前半部は、それが仮に団水の本心の吐露であったとしても、西鶴との意識のずれを実感せずにはいられない。(注1)

はたして団水は、「西鶴の生前の意図を知ってい」(前引天理図書館編『西鶴』解説)てこの序を書き、その意図に則して「織留」を編集したなどと云えるのだろうか。団水の言を文字通りに信ずることが、「織留」の内容や他の西鶴作品を問題にしつつ考察して行く時、はたして許されるのだろうか。——団水序の前半部から問題を展開して行こうとする本章以下で、私のとりあげるべき問題はいくつか考えられるが、まず、団水の称する「三部の書」という云い方、そしてそれを出発点とし

て云われる西鶴の町人物三部作創作説の当否を検討してみることから始めて行きたい。そしてその場合、

①西鶴にはたして「本朝町人鑑」「世の人心」を「日本永代蔵」と並列する「三部の書」として書こうとする意図があったと云えるのかどうか。

②「町人鑑・世の人心半書残して」という団水の言は、「織留」の内容を検討した時、真実であると云えるのかどうか。

③「織留」と「永代蔵」巻末予告にある「甚忍記」との関係は、通説のごとく、「甚忍記」の未定稿すなわち「織留」と考えることが許されるのかどうか。

等々といった問題を中心としながら考えて行きたい。しかし、右の三点は、たがいに関連しあっている問題を含んでいるので、時に前後しつつとりあげることになることを、あらかじめおことわりしておく。

すでに引用したように、「織留」団水序前半部は、「西鶴生涯のうち、述作する所の仮名草子、棟に充、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代蔵、本朝町人鑑、世の人心、これを三部の書と名づく」という一文で始まっている。これ又、前述の団水序後半部と同様、明確とはいいかねる文体であるが、今、ここで私が一瞬こだわらざるをえないのは、「三部の書と名づけ」たのは誰か、ということである。

私は、もちろん、この団水の序に第二章で記したような疑問を持つ以前は、「名づく」の主語を漠然と西鶴と考えて読んでいた。そして、た

たとえば野間光辰氏が云われるような、「これも団水の言葉であるが、西鶴は生前ひそかに、永代蔵・町人鑑・世の人心を以て、町人物『三部の書』に仕立てる考えを持っていたようである」（古典大系『西鶴集下』解説）という考え方を承認した上で、「町人鑑」「世の人心」を読もうとしていたし、西鶴自身が、三部作を意図していたという、いわば通説を疑おうとしなかったのである。そして、必ずしも私ばかりではなく、野間氏のように「団水の言葉ではあるが……」という慎重な前提を置いた場合はあるにしても、これまで、西鶴が「永代蔵」の「功なりて後」「町人鑑」と「世の人心」を「三部の書」としようと意図して書きすめたという点を疑おうとした論者は、ほとんどなかったのではないだろうか。（注2）

が、はたして「永代蔵」「町人鑑」「世の人心」を「三部の書」と名づけたのが西鶴であるという点に、誤りはないのだろうか。団水の一文は、本当にそう読めるのだろうか。

疑いの目をもってこの一文を読み直し始めると、私は一層混乱してくる。と同時に、おかしな文章でもあるように思えてくる。原本の句読点はあまり信用出来ないが、「西鶴生涯のうち」の次に句点を置いている所を見ると、この部分を「述作する」と「名づく」にかけるつもりで書いたのだろうか。それとも、「西鶴」で切ってそれを「名づく」の主語と解すればいいのだろうか。あるいは、日本語の時制が厳密でないとしても、「名づく」と現在型で書かれている所に意味を認めるべきなのだろうか。「これを三部の書と名づ」けたのは、本当に西鶴なのかどう

かが、はたしてこの一文から解るのだろうか。

ところで、この一文は、これまでどう解釈されて来ているのだろうか。こころみに、これまでの代表的な口語訳二種を参照してみよう。

- ①西鶴が生涯の間に述作した仮名交り草子は、棟に充ち、牛に汗するほどたくさんあって、世に広がっているが、そのなかで、日本永代蔵・本朝町人鑑・世の人心を三部の書と名づける。(麻生磯次氏訳)
- ②西鶴が生涯の間に述作した浮世草子は、それこそ汗牛充棟というほどたくさんあって、世に広く行なわれていたが、その中でも、日本永代蔵・本朝町人鑑・世の人心を、三部の書と呼んでいる。(前田金五郎氏訳)

一読明らかなように、右の①の訳では、原文の「名づく」が、「名づける」となっているだけであり、「名づける」のが誰かは記されていない。が、少くともこの訳からだけでは、それが西鶴であるという風には読めないであろう。原文の「西鶴生涯のうち」までは「述作する」という部分のみにかかって訳されているから、この逐語訳の立場からすれば、「名づける」のは、この文の筆者団水であるかのごとくである。が、云うまでもなく麻生氏は、その解説(注3)で、

門人北条団水の序によれば、「本朝町人鑑」と「世の人心」は、元禄元年刊の「日本永代蔵」とともに、三部作とする予定で筆をとったものである。

と明言されているから、「三部の書」の命名者を団水と考えている訳ではないようであり、むしろ前出の野間氏以上に、西鶴が「三部の書」と

いう意図を持っていたという点を確信しているような口ぶりである。

もっとも「名づける」とのみ訳された麻生氏は、この主語を漠然と、「一般の人」として、「世間ではそう名づけている」というつもりで訳しているのかもしれない。とすれば、②の前田氏の訳「三部の書と呼んでいる」という訳の方が明解であることになるが、この前田氏訳をすなおに読む以上、「三部の書」と呼んでいるのがもはや没している西鶴だと考えることは不可能であろう。②の訳が正当であるとすれば、「三部の書と呼んでいる」のは、筆者団水か、あるいは世間の人以外ではありえない。もし通説のように、西鶴が三部作を意図していたと考えるなら、麻生氏・前田氏の訳は、ともに誤りであるか、少くとも不十分であるということになる。

が、私は今、これまでの口語訳の揚足とりをしようとしている訳ではない。むしろ、一見不明確・不確かに見えるこれらの口語訳は、逐語訳であるが故に団水の文章の不明確さははっきりと浮び上らせる手がかりとなり、あるいは、あえて不明確に云うことで通説のような理解(誤解)を生ませようとする団水の作為を解明する契機となりうるのではないかとさえ思う。

団水の文章をふたたび冷静に読み直してみよう。団水は、「西鶴生涯のうち、述作する所の仮名草子」が「棟に充、牛に汗して世にはこびる」という。「はびこる」の語感に現在ではやや抵抗感があるが、「慰み草」であったのが当時の西鶴の「仮名草子」である以上、ここまでは問題はないし、西鶴作品の盛行を論証することも容易である。ここま

でに団水の作為を感じることは出来ない。

が、団水は、「世にはびこる中に、日本永代蔵、本朝町人鑑、世の人心」と続けて、「町人鑑」「世の人心」と「永代蔵」とを並列させる。しかし、この云い方はおかしいのではないだろうか。確かに「永代蔵」は「世にはびこる中に」ある西鶴の「仮名草子」の代表ともいふべきものの一つであろう。が、それと並列されている「町人鑑」「世の人心」は、「世にはびこ」っているどころか、今この「織留」の刊行によって始めて世に出る作品であり、世の人は、これまでその存在すら知らなかったはずの作品である。にもかかわらず団水は、ここで「町人鑑」「世の人心」を「永代蔵」同様に「世にはびこ」っている作品であるかのごとく読者に印象づけようとし、読者にそれらが既知の作品であるかのように錯覚させようとしているのである。それは何故であり、何のためであるのか。

答は簡単であろう。団水は、この序を伴って今出刊される「織留」が、好評を拍している「永代蔵」と同価値のものであると読者に印象づけ、それに乗せられる読者への売り込みをはかろうとしているのである。私は前章で、「団水は……すぐれたコピー・ライターの才能を示している」と云えるかもしれないと書いたが、ここでも同様の感を覚えざるをえない。我々は、一瞬、「織留」が、すでに「世にはびこる」「永代蔵」と同様のものと錯覚し、軽率な読者は、「永代蔵」の権威の傘の中で、今出刊されたばかりの「織留」を馴染みのものとして読み始めるかもしれない。団水のここでの記述は、事実上正確でないが故に、優秀なコピー

としての意味を持ちうるのである。

しかも団水は、「日本永代蔵、本朝町人鑑、世の人心、これを三部の書と名づく」と、駄目を押すようにしてこの一文を閉じる。ここではもはや「町人鑑」「世の人心」は、読者に周知の三部作であるかのような印象を与えられさせる。が、云うまでもなく、「三部の書」と「名づける」人、あるいは「呼んでいる」人が、世間一般の人、あるいは当時の読者でありうるはずがない。何故なら、当時の一般の読者は、「町人鑑」「世の人心」の存在をここで知らされ、「織留」によってその内容を始めてうかがいうるのだから……。

とすれば、「名づく」の主語は誰でありうるのか。団水は、西鶴が生前に「三部の書」と名づけたとは云っていない。と同時に、「名づける」「呼んでいる」のが自分であるとも云ってはいない。しかし、団水が「名づく」の主語を明確にせずに書くことの効果は明らかである。すなわち、明確に西鶴が名づけたと書けば宣伝臭があらわになり、自分（筆者団水）が名づけたと書けばその不遜さが読者に逆効果を生むであろうから、この場合、主語が不明確で何となく皆がそう呼んでいる感じである方が三部作説に対する読者の信頼をかちうる上で有効なのである。

私は今、「名づく」の主語を団水が意識的に不明確にするような文体をあえて馴使したのではないか、という疑いを持たざるをえない。そこには、前述のように、「町人鑑」「世の人心」を「永代蔵」同様「世にはびこる」作品として印象づけようとする場合と同じく、「織留」の価

値を売り込もうとする団水の作為が感じられるように思われるのである。

しかし、それでもなお、以上の追求によって、西鶴自身に「三部の書」と名づける意図がなかったと結論することは難しいであろう。何故なら、以上は、団水の文体に、「織留」売り込みのための作為が存在するというやや不確かな証明にはなっても、それが、西鶴に三部作創作の意図がなかった、という証明にはなっていないからである。とりわけ、団水序後半部の「両部の名のみにして、むなく三部の闕たらんには、ぬしの本望もかなはず」という「書林の某の歎き」が事実であるとなれば、西鶴が生前、書肆らに三部作の企画を語っていることになるから、かりに団水のいささかの作為が序の中にあるとしても、西鶴が三部作を企画したということは真実なのではないか、という強力な反論が当然予想されるであろう。

もちろん私はこの反論に対し、前章で論じたように、この「書林の歎き」を書く団水の立場を考え、この序文全体に疑惑を持つ視点から、ふたたび反論することは可能である。そしてそれが、三部作説の信憑性を裏付けるための団水のフィクションという解釈を呈示することも不可能ではないように思われる。

しかし、序文のみを問題にしてそのような議論をくり返しても、それは不毛の水掛け論に終わってしまうだけであろう。私はもはやここまでの論述で、団水序で強調される三部作説が、通説で云われているようにには確かなものではないのではないかという疑問を呈示できれば十分であ

る。思えば、西鶴が三部作を企画したか否かは、団水や書肆にとっては「織留」売り込みのための重要な要因であったとしても、没後の西鶴にとっては大して問題になることではなかったはずである。西鶴にとっても今の私にとってもより大事なことは、団水の言のままに「織留」をうけとめることを前提としてそれを考えることから生ずる誤解をいかに避け、西鶴の意図を生かしてどのように「織留」を読むべきか、であることは明らかである。

従って私はここで、三部作説に対して結論を出すことを一時保留し、「織留」全体が、「町人鑑」「世の人心」であると云えるのか、二書を「半書遺して」という団水の言は真実なのか、等を考えつつ作品自体を問題にし、それらの検討の後で三部作説の問題をふたたびとりあげることにしたい。

西鶴が、「本朝町人鑑」及び「世の人心」という作品を書こうとし、刊行に至るまでの分量を書かずに中断したという推定に誤りはないであろう。しかし、現在の「織留」巻一、二のすべてが「町人鑑」であり、巻三・六の全章が「世の人心」であったと云えるのであろうか。

団水の序を信じ、その序を付した流布本の形態を見るかぎり、一応右の推定が可能である。が、私は、すでに団水序への疑問をたびたび表明して来た。とすれば、あまりに素朴な出発点ではあるが、団水序の線にそっていわれる巻一、二が「町人鑑」、巻三・六が「世の人心」という通説を改めて再検討してみなければならぬはずである。

もちろん、これまで、右の通説がまったく疑われていない訳ではない。例えば、野間光辰氏は、日本古典文学大系『西鶴集下』解説において、

「『町人鑑』の方は、僅か二巻ながらともかく纏りを見せているのに反して、世の人心の方は随所に不備・破綻を示している。同じような題材で書きかけた反古の断片を取合せて、漸く一章分を編み立てたと覚しき部分や、断片ならずとも、以前何かの草稿として書き残していたものを取上げたと覚しき部分が眼につく。恐らく世の人心は、全部が全部世の人心として執筆せられた草稿ではあるまい。題材的にも修辭的にも、町人鑑や先行の永代蔵、或は後出の胸算用などとは重複する分を多々含んでいるのである」

と指摘されているし、前田金五郎氏も又、角川文庫『西鶴織留』解説において右の一節を引用して賛意を表しているようである。

しかし、野間氏は、「恐らく世の人心は、全部が全部世の人心として執筆せられた草稿ではあるまい」と云われてはいても、作中のどれがそう云えるのかを具体的に指摘されている訳ではない。後述のように、私自身も野間氏の右の指摘に同意する結論を出すことになるが、右のやや抽象的な指摘は、今の場合団水の序を疑う一つの契機として以上の意味を持つてはいない。

もっとも、野間氏は、「世の人心」として執筆されたのではないと思われる草稿を見わけると判定の基準を一つ出されている。すなわち、「題材的にも修辭的にも、町人鑑や先行の永代蔵、或は後出の胸算用などと

重複する分を多々含んでいる」という点である。

しかし、「題材的にも修辭的にも」他の作品と重複する部分を含んでいるということが、ただちに「世の人心」の草稿ではないということにならないのは明らかであろう。すなわち、同様な題材が別々の西鶴作品の中で二度以上使用されている例が、枚挙にいとまない程多くあることは、今更例証を必要としないからである。さらに、未発表であった「世の人心」に他作品と重複するものがあるのは、むしろ当然だから、野間氏のように重複する部分があることを問題にして「世の人心」の草稿にあらずと結論する規準を出すよりは、同一の作品の草稿中に重複があるか否かを問題にする点から考える方が、後述のように、同一作品中のバラエティを考えて作品を書くのが常である西鶴の創作意図にそうことになるはずである。

いずれにしても、これまで「織留」の中に「町人鑑」「世の人心」以外の草稿が編入されているかもしれぬと疑われたことはあっても、それが具体化されることはなかったようである。しかし、団水の序を信じきれない私には、「織留」巻一、二のすべてが「町人鑑」として書かれ、同三・六が「世の人心」として書かれたとは考えられない。何故なら、後述のように、「町人鑑」「世の人心」という作品とすべく西鶴が書いた数篇があることには間違いはないとしても、「織留」全体を団水序にとらわれず通読した時、その半数以上に私は、これは「町人鑑」「世の人心」とは別の意図をもって書かれた作品ではないか、という疑いを持たざるをえないからである。

が、このような問題を考える場合、抽象的な論究は、大して意味を持ってないであろう。いささか乱暴であり、推論に推論を重ねることになりはしても、一応の具体的な究明を行なってみなければ水掛け論を脱しえないし、団水序の梓の中で「織留」を見て行くという通説の立場を打ち破ることは出来ないであろう。

しかし、「町人鑑」「世の人心」として一応編集されて型の出来上っている作品からそれを行う時、どのような方法が可能であろうか。

現在、西鶴の遺稿集に関しては、版下の究明が盛んである。が、「織留」のように、西鶴草稿の面影すら版下に生かされていないと思われる作品の場合、版下の究明によってその手がかりをえることは不可能に近いであろう。とすれば、右の問題の究明の場合の手がかりは、各章の創作意図を問題にしつつ、それが「町人鑑」又は「世の人心」であるかどうかを問題にするより仕方がないのかもしれない。が、創作意図の解明という方法は、すこぶる客観的な説得力を持ちにくく、それだけで出した結論は実証的な現在の西鶴研究の風潮からすれば嘲笑をかうだけに終るのが落ちであろう。そこで私は以下、現在の「織留」に編入された作品が書かれたと推定される元禄元年～三年ごろの西鶴の作品の書き方、その前後の西鶴の状況や他の著作との関連、「町人鑑」「世の人心」という主題の立て方と各章におけるその主題の生かされ方等々を中心に、「織留」全体をいささかなりとも実証的に見える型で問題にし、その草稿がどのようなものとして存在していたのかを具体的に推定して行きたい。

元禄元年前後の西鶴がどのような作品の書き方をしていたか、という点については、現存の西鶴作品を問題にして推定する外ないことは明らかである。そしてその書き方は、各作品の素材や内容によって必ずしも同一ではなさそうである。が、「織留」のような素材と内容の場合、西鶴の書き方、より具体的には、各章が成稿に至る過程は比較的明らかではなからうか。

私はかつて、「西鶴小説における成稿過程の一面」(跡見学園女子大学紀要・第二号)なる拙論において、「日本永代蔵」の場合を具体的な例としつつ、町人社会内部で日常的に見聞した素材をとりあげる作品の場合、メモや旧稿などを参照することなく書き下すという書き方をしているのではないかと推定した。そして、そのような素材と内容の作品を書く場合は、雑話物的な作品・武家物的な作品を書く場合のような素材収集活動を行ったり、それをストレートに生かすといった書き方は行なわず、かりに旧稿があってもそれを一端破棄して新たに書き下しているのではないかと論じたのであった。

そして、その結論は、「永代蔵」以外のいわゆる町人物的な素材と内容を備えた他の作品についても云えるのではないかと考える。例えば「永代蔵」と「織留」との間には、野間氏のいわれるように「題材的にも修辭的にも」重複する部分があるが、西鶴は、当然のことながら、「永代蔵」を参照しつつ「織留」を書いているとは考えられない。又、「織留」と「胸算用」との間にも共通する題材や修辭が多くあるが、後

にも述べるように、「胸算用」の成稿過程で、西鶴は、その時未刊の旧稿であつたはずの「織留」所収作品を、少くとも参照しながら書いてはいないと思われる。西鶴に以前書いた時の記憶がなかったとは云えないが、旧稿を引っぱり出して参照しつつ改稿するという作業が、西鶴によって行なわれたとは考えられない。さらにそれは、書簡体という形式の目新しさを持つ故に、かつて用いた素材や内容をふたたび生かしている例の多い「萬の文反古」の場合にも云えるであろう。「文反古」に他作品と類似の題材や修辭があつても、西鶴がいちいち他作品を見ながら書いている訳ではないという実証は、おそらく簡単なはずである。

又、「織留」内部においても類似する題材や修辭があることは一読明らかであるが、それらの場合も、どちらかを参照しつつ書くという関係にないことは云うまでもない。例えば、

「身軀時めく人のいへる事は、横に車ものいて通し、世を暮しかぬるものいふ事は、人のためになりても是をよしとは聞ず」（「織留」一の三）

という文章と

「身過に仕合せありて、屋造も人がましくせし人のいへることは、ずいぶんと愚なる事にても、人皆耳をすまして聞届け、又手前浅間敷なりくだりたる人の、一言に利のせまりたる事を申にも、誰か聞入ける人なく、萬につけて口惜き事のみ、心にもなき事にうたがはれぬ」（「織留」三の一）

という文章の主旨は同じといえるが、西鶴が前者を参照しつつ後者に改

稿したとか、後者を参照しつつ要約して前者に改稿したとか云えるような関係にないことは明らかであろう。確かに西鶴の頭の中に、前者を書いた記憶が残っていたはずだということは出来る。しかし、少くとも西鶴は、後者を書く時、前者を参照しなければ書けないなどという事があるはずもないし、この部分の主旨は同じでも、その前後の話の展開の異なる旧稿を引っぱり出して改稿するなどという作業が西鶴によって行なわれたと考える方が滑稽であろう。

以上によって私は、いわゆる町人物的な作品を書く場合の西鶴は、かなり簡単なメモ程度は持っていたのではないかという点までは否定出来ないとしても、自らの見聞を中心に書き下すという書き方をしていると考えてよいのではないか、と思う。又、そのような素材や内容の作品の場合は、一度書いた旧稿を参照しつつ改稿するなどという書き方はせず、旧稿を一端破棄して新たに書き下すという書き方をしていると考えべきであると思う。そしてその書き方は、眼の痛みその他の病氣といった体力的な要因によって、雑話物、武家物で必要とされるような題材収集の努力がおっくうになったと思われる西鶴にとって、一番書きやすい方法でもあったのであろう。元禄二年以後に書かれたと推定される作品のほとんどが、身近に見聞出来る世界を題材としている理由の一つとして、その時期における西鶴の書き方の問題が関係することは、ほとんど間違いないのではないか、と思われてくるのである。

やや脇道にそれた感じであるが、以上によって私は、町人物的な題材

の作品を書く場合の西鶴が、その作品の主題をきめて書き下すという方法で各章を書き、それを類集して一作品とするというやり方をしていたと推定出来るのである。とすれば、団水の指定に従って「織留」を見るのではなく、「織留」各章の創作意図やその主題を私なりに見定めることによって、「永代蔵」以後の西鶴がどのような作品を書こうとしたか、を推定することも許されるのではないだろうか。

が、「織留」以外の遺稿、あるいは元禄元年、二年に刊行された作品については別の機会に触れ、より幅広く元禄元年の西鶴の創作の実情を検討した方が適切であるように思われる。そこで、本稿では以下、「織留」に見られる範囲内で、西鶴がどのような作品を書こうとしてそれを中断したか、又、それは何故か、といった点のみを問題にしつつ、前述の団水序への疑問を私なりに解明して行きたい。

ところで、西鶴が、元禄二年正月の刊行を予期して「本朝町人鑑」という作品を書こうとしたことは、確実である。それは、従来も指摘されているように、「織留」巻二の一「保津川のながれ山崎の長者」の冒頭が、「本朝は、天照大神元年より今元禄二年の初春まで…」と始まり、「…是皆町人の中の町人鑑といへり」と続く文章であることによつて「本朝町人鑑」と命名する作品の一章であることが明らかだからである。この章が、もし「本朝町人鑑」が単独で完成され出刊されていれば、開巻第一章の作品となっていたことは確かであろう。

が、これが今「織留」二の一に置かれているのは何故か。その理由は

前章でも一部触れたように二つ考えられる。一つは、元禄七年出刊の「織留」巻頭の作品の冒頭に「今、元禄二年初春まで」とあるのが新刊の書としてふさわしくないことであり、一つは、「織留」の編者（おそらくは書肆上村平左衛門）が、原刻本に見られるように「織留」全体を「世の人心」と副題して出刊しようとしていたため、「町人鑑」であることがあらわな本章を巻頭に置くのを嫌ったためだと推定出来ることである。従つて、それが巻二の一にあるのはあくまで編者の都合であり、西鶴が「本朝町人鑑」の第一章を書いたという事実は動かない。

しかし、西鶴は、「町人鑑」をどの程度書いて中断したと云えるのだろうか。団水の指定した「織留」巻一、二の中に西鶴が「町人鑑」のために書いた作品はどれ程あるのであろうか。

が、この問題を検討する場合には、「本朝町人鑑」という題名で作品を書こうとする時の西鶴の町人鑑というイメージがどのようなものであったか、という点がまず問題にされなければならないであろう。

西鶴は「織留」の本文の中で、「町人鑑」「町人の鑑」という語をわずか三例しか用いていない。以下のごとくである。

①江戸は天下の町人北村、奈良屋、樽屋をはじめ、諸国の惣年寄、金座、銀座、朱座、此外過書の舟持、世上に名をふれて、是皆町人の中の町人鑑といへり。（「織留」二の一）

②そもく親の手前より片巻枚、銭二文もらひしを、かく長者になる事、町人の鑑也。洛陽分限袖鑑の第二十八番目に、山崎屋と見えしは此人の事なり。（同右）

③家名其隠なし。財宝の外、隠居分とて有銀三千貫目、大坂より爰に
来ての住家、人皆見および、其身一代のはたらき、是町人の鑑ぞか
し。〔織留〕二の二)

右の例に見られるように、西鶴が持っている「町人鑑」のイメージとは、まず第一に、巨富を積み世間に名を知られている町人であることである。第二には、②③の例に見られるように、自らの才覚などによって其身一代のはたらきで第一の要件をみたすことである。いわば、西鶴にとっても、町人鑑は、文字通りの、そして元禄期においては実現がほぼ困難な町人の理想像にすぎない。

「永代蔵」においてすでに「銀が銀をためる世の中」であることを強調し、西鶴の理想としたであろう「親のゆづりをうけず、其身才覚にしてかせぎ出」すことがいかに困難であるかを知っているはずの西鶴が、右のような町人鑑のイメージを持ちながら「本朝町人鑑」を何故書こうとしたのかは解らない。書肆の要請、理念よりも現実把握が先行する西鶴の認識方法、ややプリミティブな作家意識等々をあげてみても、それで十分ということはないであろう。

が、それを中絶した理由はほぼ明らかである。すなわち、「永代蔵」での現実認識をより明確に自覚して、「望姓持ぬ商人は、随分才覚に取廻しても、利銀にかきあげ、皆人奉公になりぬ。よき銀親の有人は、おのづから自由にして、何時にても見立の買置、利得る事多し」(「織留」一の二)と書いている時期の西鶴が、右のようなイメージの町人の鑑をその見聞から求めても、一書にするほどの材料を集められるはずがない

ということである。西鶴は、「町人鑑」を企画してもそれを書けるような時代の状況に生きている訳ではなく、一方西鶴も又、時代の状況の推移、致富の過程で生まれる町人たちの裏面の生きざま、貧しく生きる町人の実在等といった現実を無視して、もっともらしい町人の鑑などを書いてすましていられるような作家ではない。というより、そのような作品が面白くなるはずもないし、もっともらしい町人の鑑を書くことなどは、西鶴の柄にあらうことでもないであろう。

が、ともかく、西鶴は「町人鑑」を書き始め、途中で投げ出した。その理由は、右のように町人鑑といった題材を現実を集めにくかったということばかりではなく、書肆との関係で書きやすい作品を先にしあげるといった事情や、前述のような眼の痛み等の肉体的な要因も関連しているかもしれない。しかし、今、途中で投げ出した理由を憶測しても、さしたる意味はないであろう。今、本稿において問題なのは、一応元禄二年正月刊を予定して書き出した「町人鑑」を西鶴はどれだけ書いたと見ることが出来るのか、ということである。

すでに記したように、「織留」巻二の一が「町人鑑」として書こうとしたものであることは明らかであり、同巻二の二「五日帰りにおふくろの異見」も又、前引の「町人の鑑」の語を章末に加えて「町人鑑」らしくしようとしている点から、「町人鑑」として書いたものと見ることが出来るよう。しかし、この二章とも、西鶴は、すこぶる書きにくそうである。あえて云えば、無理をして「町人鑑」に仕立てているような印象がある。とりわけ、両作品とも章末においてその登場人物を「町人の鑑」

とほめたたえている所などは、とってつけたような感じである。さらに巻二の一で「町人の鑑」とされる男が章末の四分の一に登場するのみで、同章の主要説話とみるべき部分の主人公の長男としてつけ足りに登場する人物であること、又、巻二の二の男は、同章の題名である「五日帰りにおふくろの異見」の話が終った後の三分の一程の分量の中にのみ登場する男であること、などは、これらの両章を何とか「町人鑑」らしくしようとしているのではないか、という疑惑すら生じさせる。

しかし、「町人鑑」を西鶴が書こうとすれば、こうなるのも当然であったのかもしれない。すでに述べたような「町人の鑑」という既存の常識的なイメージを持ちつつ、それを主題に何とか面白い話を類集して書こうとしても、所詮それは無理な話である。西鶴は、「町人鑑」を企画してまずこの二章を書き、そのことに気付いたのではないだろうか。

「永代蔵」をすでに書いてしまった西鶴にとって、「町人鑑」とは、あまりそらぞらしい主題であることを自覚せざるを得なかったのではないか。

結果論ではあるが、「織留」巻一、二の九章のうち、「町人鑑」「町人の鑑」の語を含む作品は、右の二章以外にはない。しかし、その語を含まないからと云って、他の七章が「町人鑑」として書かれたものではないともいえないかもしれない。西鶴は時に律義であり、例えば「世間胸算用」二十章の本文のうち十七章で各一ヶ所「胸算用」の語を用いるが、「武家義理物語」では「義理」という語を多用する等のことを行っているが、全部の章でそれを用いる程のサービス精神をもちあわせているようではない。とすれば、西鶴が「町人鑑」を企画し、右の二章以外のど

れを「町人鑑」として書いたか、という問題は、他の七章の内容を検討することによって出すより仕方がないであろう。

西鶴は、町人鑑という言葉に、すでに述べたようなイメージをこめている。従って、今「町人鑑」「町人の鑑」という語を含め七章を検討する場合、そのイメージにかなう人物が作中に登場するか否かは、その章が「町人鑑」として書かれた作品かどうかを考える一つの指標となるであろう。やや煩雑ではあるが、各章ごとに簡単に見て行こう。

○巻一の一「津の国のかくれ里」――前半は好色心をこらえたために米相場で成功した男の話であり、後半はその男の親仁の遺言状という趣向の話である。「町人鑑」の一章と見れば見られぬこともない。

○巻一の二――本章の大半は借錢故に苦勞して商人をやめ手習師匠になるがそれもうまくゆかず貧に苦しむ男の話。章末の五分の一程でその男が長持灰を發明して巨富を積む話に転じて結ぶ。「町人鑑」のために書いた章と見てよいと思うが、後述するように、章末でとって付けたように女房のことが出て来て「うき世帯の時、男によくつかへて勘忍せし身の上、天是をあはれみ給ふなり」といった一文が置かれるのが不審。

○巻一の三「古帳よりは十八人口」――老婆が近年の生活ぶりを批判し、世間の嫁の心のありようなどを描く。「町人鑑」的色彩なし。

○巻一の四「所は近江蚊屋女才覚」――近江蚊屋の産地の様子などを前半に、近江に通い商いする万屋甚平というさえない男の話を後半に書

く。「町人鑑」的色彩なし。

○巻二の三「いまが世のくすの木分限」——旦那から資本をもらって両替店を開いた二人の手代のなりゆきを旦那が評する話。「町人鑑」とも見られぬではないが、その面での強調がなく、後述のように、「智有、仁有、勇有と、みなみなたのもしく奉公を勤めける」という章末はいささか問題。

○巻二の四「塩うりの楽すけ」——金を拾って返す正直な塩売りをやや皮肉な視点から見る医者が登場させて、当世のありようを諷刺する。

「町人鑑」的色彩なし。

○巻二の五——江戸の小川屋という塗物屋が繁盛しはじめた由来を書く短章。短章であるせいか「町人鑑」としての強調は見られない。

以上、簡単に七章を見て来たが、その中には、巻二の一、二のように「町人鑑」であることを明確に主張出来るような作品は見当らない。巻一の一、二、巻二の三の三章は、しいてそう見れば見られないことはないが、もし西鶴が「町人鑑」の一章として書くとする創作意図をもっていたとすれば、たとえ「町人鑑」の語を用いなくとも、それなりの強調が行なわれてしかるべきであろう。あるいは、その言葉を章中で用いず「町人鑑」の一章として書くとするなら、内容的な強調が一層必要とされるであろう。

いづれにしても、以上の七章は、明確に「町人鑑」として書かれていないという事は出来ないようである。が、以上のようなやや不確かな追求によってでは、逆に「町人鑑」が二章書かれただけで放棄されたので

はないか、という私の仮説も説得力を持てないであろう。そこで今視点を変えて、これらの七章は、「町人鑑」以外の作品のために書かれた作品の草稿だったのではないか、という仮定から出発してこの七章を問題にしてみよう。そしてその時想定される作品が、云うまでもなく幻の作品「甚忍記」である。

「甚忍記」が發展して「織留」、とりわけ「町人鑑」となったのではないか、という仮説は、もはや定説化している。しかし、すでに論じたように、「織留」巻二の一、二は明らかに「町人鑑」として書かれたものであり、「織留」巻三・六の何章かも後述のように「世の人心」として書かれているものである。とすれば、それらは「甚忍記」を改稿することによって書かれたもののだろうか。

私は、すでに述べたように、町人物的な題材の場合、西鶴は、旧稿を参照したりせず新たに書き下すという書き方をしているのではないかと推定している。従って、もし「甚忍記」の改稿によって「織留」とりわけ「町人鑑」が成立しているといういわば通説が正しいとすれば、私の推定は、きびしい反証に出あうことになる。はたしてそのように考えることが出来るのであろうか。やや脇道になるが、私は、「甚忍記」に対する私なりの憶測を記さざるをえないようである。

仁義礼智信の五部八冊であり「人は一代名は末代」の傍題を付した「甚忍記」の刊行予告は、元禄元年正月刊の「永代蔵」巻末にのる。し

かし、西鶴存生中に出版された作品の中に刊行予告がのるのは「甚忍記」のみであるにもかかわらず、それは刊行されない。さらに、同年五月刊の西沢版「永代蔵」には「全部八冊出来式奴」との値段まで記した刊行予告があるにもかかわらず、それが刊行された形跡は現在までの所発見せられていない。しかし、それがもし刊行されていなかったとしても、二度の刊行予告までする以上、八冊という予告から見て予告の段階でかなりのまとまりを持った作品であったと考えることは可能である。と同時にそれが、少くとも元禄元年五月までは、一つのまとまりをなしていたことは確かであろう。

それは、どのようなものだったと考えられるのだろうか。まず、その書名から問題にしてみよう。

野間光辰氏は、「一体『甚忍記』という書名は、意味があるやうでないやうな、頗る響の悪いそして落着かない書名である」（『西鶴と『堪忍記(上)』』、国語国文・昭和17年12月号）といわれ、その書名が浅井了意の『堪忍記』のもじりであることを指摘する。そしてそれはその通りである。が、西鶴は何故そのような「頗る響の悪いそして落着かない書名」をあえて採用したのだろうか。

その理由の一つとして、元禄元年前後の西鶴が、「新長者教」「新可笑記」「桜陰比事」という、先行作品をもじった書名の作品を書いていることと関連させて考え、仮名草子類に対抗意識をもやしつづ書く西鶴の新しい、作品への意欲の発露を云うことが出来るかもしれない。しかし右の三つの書名以上に「甚忍記」が落ち着かない書名であることは明ら

かである。「甚忍」が、「ひどく我慢する」「じっとたえ忍ぶ」くらいの意味であることは簡単に推測出来ても、「甚忍」とは成語として熟していない言葉である。が、その熟さぬ言葉をあえて用い、「堪忍記」にならってそれを仁義礼智信の五部にわけ、「人は一代名は末代」と傍題してあるのを見る時、そこに西鶴の何らかの意図が感じられはしないであらうか。

仁義礼智信の五常が、儒学においてこの世で体すべき理想の理念であり徳目であることは云うまでもない。それを実践すれば、「人は一代」であっても「名は末代」に残ることであらう。が、それを実践するには単なる「堪忍」くらいでは足らず、「甚忍」が必要とされる。西鶴は、近世封建社会の理想とする徳目の実践が、常に「甚忍」という苦痛を経過しなければ行けないこと、了意のようにそらぞらしく「堪忍」を説いて五常の実践を教訓しても何の意味もないことを実感しつつ、あえて「甚忍」の語を用いたのではないか。

忍が、近世封建社会を生きる生活の智慧として最も必要とされるものであることは云うまでもない。それは町人のみならず武家にも云えることである。そして、五常の実践、理想のモラルを実行する時、人は甚忍を要請される。と同時に、肩胛張って甚忍する五常の実践者は、現実の社会でモラルが常に理想でしかない時、かりに「名は末代」であってもその社会から疎外され、時に話の種となる。私は、五常を部立てとした作品の題名が、単なる堪忍ではなく甚忍であることに西鶴のややアイロニカルな視点の存在を見るが、それは深読みにすぎないであらうか。

それにしても、五常を部立てとして「甚忍記」と題するこの書名は、思えば便利な書名である。というのは、この世を生きる人間の行為は、ほとんど仁義礼智信のいづれかに関係するものとして分類出来るであらうし、それらの実践には何らかの意味で甚忍がともなうといえそうだからである。すなわち、五常の部立てを持つ「甚忍記」という書名は、西鶴が何を書いてもその中におさめうるものである。従ってそれは、町人でも武家でも、好色生活でも経済生活でもとりあげることの出来る書名である。すでに「永代蔵」を書き終え様々な世界に触手をのびしている貞享四年後半期の西鶴にとって、これはまさに融通無碍な書名であり、何を書いてもその名で出せる合切袋的なものだったのではないであろうか。それ故に、生前刊行の作品には唯一である刊行予告が、「永代蔵」巻末にかかげられたのではないだろうか。

やや書名にこだわってしまったが、ここで疑問が二つ生まれる。一つは、①本来どんな内容かが書名からでは解らぬはずの「甚忍記」が「織留」と想定されて通説化してしまったのは何故か、ということであり、一つは、②一応のまとまりを持っていたと思われ、内容的には何でもよいと思われるこの作品が何故刊行されなかったのか、ということである。まず①の問題から考えてみよう。

今、右の通説が形成されてきた過程を追う余裕はないので、結論のみを記せば、大きく見て四つの誤解から生まれて来たのではないかと思われる。

第一点は、この予告が「永代蔵」の巻末にあったことから生まれた誤

解である。すなわち、そのことが「甚忍記」は町人物的作品というイメージを何となく与えたのであろうが、前述のようにその書名を見ても、又、貞享四年から元禄元年にかけての西鶴の創作活動の推移を見ても、その全体が町人物的作品であるという必然性はないはずである。

第二点は、「永代蔵」以後の西鶴の創作活動が、好色物↓武家物↓町人物という型で西鶴作品の展開をとらえるやや俗説的通説にわざわざいされて、もっぱら町人物を中心に論じられて来たために生じた誤解である。しかし、周知のように、元禄元年までの西鶴の創作活動の中心が、むしろ町人物以外の作品であることは、その創作年表を一見すれば明らかである。元禄二年以後、おそらくその病氣などによって、題材収集の努力を要さない、身近な見聞を中心とした作品を書き始めることは確かであるが、「甚忍記」を書いていると思われる時期の西鶴が、町人物的な作品のみを書き、その中に収録しようとしたと考えることは出来ない。

第三点は、「甚忍記」及び五常の部立てが融通無碍であるが故に、「織留」のいくつかの章が五常のどれかを書いたものと分析出来たために生じた誤解である。もちろん私も、後述するように、「甚忍記」として書かれた作品のいくつかが「織留」に編入されていると考えるが、五常のどれかを書いている故に「甚忍記」の一つといういい方をすれば、前述のようにどんな作品でも仁義礼智信のどれかを書こうとしたものと云えないこともないから、②で問題にするように、「織留」だけが「甚忍記」であるということは出来なくなるはずである。

第四点は、「堪忍記」の影響をうけていると見られる点が「織留」に存することから生ずる誤解である。確かにその影響の見られる作品はいくつかあるが、そのことと「織留」全体が結びつかないことは云うまでもない。何故なら「織留」は一作品であつたのではなく、後述のようにいくつかの系統の草稿を編成していると見られる徴表を示しているからであり、又「堪忍記」の影響は「織留」以外の作品にも見うるからである。

結局私は、「甚忍記」イコール「織留」という見方に賛成できない。とすれば、「永代蔵」で予告した段階で一応のまとまりを持っていたと考えられる「甚忍記」は、どこへ消えてしまったのだろうか。ここで、何故刊行されなかったのかという②の問題に移る。

宗政五十緒氏は、「西鶴後期諸作品成立考」（『西鶴の研究』所収）で「『甚忍記』の解体」という見方を提出されている。私は、細い点に関して宗政氏とかなり見解を異にするので詳細は別稿に譲るが、「甚忍記」が解体再生しているとする氏の指摘は、基本的には正しいのではないかと思う。今、細論する余裕がないので、私見の推定の結論のみを以下に記しておきたい。

すでに論じたように、五常を部立てとする「甚忍記」は、どんな内容でもとり込める便利な書名であつた。しかし、書型・各冊の丁数がほぼ確立している当時であつて、五常のそれぞれと関連を持つ話を同じ分量づつ書くことは簡単ではなかつたのかもしれない。時に二冊分あればよい部立ての部分が三冊分集つたり、一冊必要な部分が足りなかつたりということは、十分起りうるであらう。一応まとまっていたとは云え、

「甚忍記」は、予告の段階では、仁義礼智信に配分するにはアンバランスだつたのではなからうか。

と同時に、この時点の西鶴に書肆の注文は多い。とすれば、やや憶測めくが、合切袋的な「甚忍記」の中で比較的分量の多く書けている部立ての作品、それが武家物、雑話物的な内容のものであれば材料の多く集まっている部立てのものを、独立した作品に仕上げ、書肆に渡したりするということとはなかつたであらうか。

そう考えうるとすれば、元禄元年春の段階で「甚忍記」が刊行されなかつた理由は、簡単に推定出来る。すなわち、元禄元年二月に刊行された「武家義理物語」として、「甚忍記」の一部が再生されたのであり、当然のことながらそれは、「甚忍記」の義の部に収録されるはずのものを中心として編成されたと見られるであらう。もちろん六冊の「武家義理」を編成する以上、新たに書き加えた作品、義の部以外の作品も加えられていると思われるが、その解明を今行なう必要はあるまい。

が、いづれにしても、「甚忍記」には、まだ多くの作品が残されているはずである。西鶴にしてみれば、何でもとりこめる便利な作品「甚忍記」の企画を捨てるはずもなく、近刊を予定して作品を書きつづけたのであらう。それが、同年五月刊の西沢版「永代蔵」の、値段を付け「全部八冊出来」とまで記した予告を生むことになったと推定出来そうである。

しかし、それも刊行されないままで終る。理由は、やはり編集上のものと考えるべきであらう。確かに仁義智信などの話は書きやすいであらう。

うが、礼などを主題に面白い話が書けるとも思われない。とすれば、「甚忍記」にしようとして書きためた作品を解体して独立させ、書肆の要請に応じて元禄元年十一月刊の「新可笑記」、二年正月刊の「本朝桜陰比事」に再生させたと推定出来ないであろうか。

「新可笑記」について論ずるのは別の機会にゆずるが、その作品の多くは、仁義礼信智などをともかくもあつかった作品と見ることが出来るのである。そして、云うまでもなく「桜陰比事」は、智をあつかったと見られる作品がほとんどである。

以上、あまりにも大雑把な推定をこころみだが、「甚忍記」が刊行されなかった事情は、右のような型で解体、再生され、一書として出すに足る程の分量を失ってしまった故と考えるのが、もっとも妥当なのではなからうか。

しかし、前述のように、「甚忍記」が合切袋的なものであるとすれば、その中には町人物的な作品や好色物的な作品もあったと考えることが出来るであろうから、他にも「甚忍記」が解体・再生したものもあるのではないかと考えられないでもない。例えば、元禄元年の九月以前の刊行であることが明らかな「好色盛衰記」である。しかし、その刊行月が明確でない現在、私がこれ以上の憶測を加える必要はないであろう。

と同時に、解体、再生される作品もある一方、生前どこにも使われることなく、草稿のままで残された作品もあったであろう。それはどのような作品であり、どこに残されていると推定出来るのだろうか。

長い廻り道をしてしまった感じであるが、私はやっと、「織留」巻

一、二の中で明確には「町人鑑」と云えない七章を問題にする段階までたどりついたようである。

「甚忍記」として書かれ、別の作品に編入されずに終った作品が存するとすれば、それはどんな特色をもっているであろうか。

まず考えられることは、どこかで「忍」を強調していることであろう。次は、前述のように絶対的な指標ではないが、五常の徳目を内容的に具体化して強調する創作意図が見られたり、それらの語を用いたりしているという点であろう。

ところで、前に検討した「織留」巻一、二の七章は、いささかもそれらの特色をそなえていると云えるだろうか。

すでに野間氏が「西鶴と『堪忍記』(中)」(国語国文、昭和18年1月号)で指摘しておられるように、「織留」巻一の二は、章末において女房の「堪忍」を強調する点、二の四での塩売の正直とその恩をうけた手代の義の強調、二の三での「智有、仁有、勇有」といった点よりの主人の智仁勇の強調をあげられ、それらを「甚忍記」らしさを持った章とする。(もちろん氏は、『甚忍記』とは『町人鑑』の予定題号)(前出野間氏論文)という立場に立たれるから、巻二の一からも「甚忍記」らしさを云われているが、前述のように巻二の一は「町人鑑」でしかありえないと考えるので、今は触れない。

そして、私は、以上の三章以外にも「甚忍記」らしさを見うる章があると思う。例えば二の五の店の主人が、二の四につづいて正直であった

ことを強調されている点、一の三で現代の奢りぶりを批判する内容や「わづか一とせのほどは、たがひに堪忍しあいて」と「堪忍」の語が出てくる点、一の四の主人公のどうにもならない世の中へのあきらめ、等「甚忍記」の内容にふさにわしいと云えるかもしれない。又、一の一は、好色心を押えて成功したという部分を強調して「好色」への勘忍を書いていると云えないこともないが、それによってこの章が「甚忍記」らしいなどと云えば、いさささこじつけめくであろう。

以上、野間氏の論を勝手に援用した型になったが、私は、一の一は判定不能としても、他の六章が「甚忍記」のために書かれた草稿であると考えて間違いないのではないかと思う。少くともそれは、「町人鑑」のために書かれた作品ではないと断定してよいであろう。

結局私は、「織留」巻一、二のうち、西鶴が「町人鑑」として書き下した作品は、かりに一の一がそうであったとしても三章しかなかったと結論せざるをえない。西鶴は、元禄元年のおそらく半ばすぎごろ、「甚忍記」を解体、再生させて「新可笑記」「桜陰比事」を編成している時期に、「町人鑑」という作品を書こうとしたのであろう。そしてその時西鶴の頭の中に、「甚忍記」の中で他の作品に再成されず内容的にふさわしいものを「町人鑑」の中に編入してもよいくらいの気持はあったかもしれない。しかし、「町人鑑」として意気こんで書きかけた作品は、二、三章書いただけで投げ出してしまふことになるのである。それが二、三章で投げ出された理由についての私見はすでに述べたのでくり返さないが、いづれにしても「町人鑑」の草稿と「甚忍記」の町人物的草

稿は、そのまま西鶴没後まで残ったことになる訳である。それが「織留」巻一、二として出刊されたことを西鶴がどう考えたかは解らぬが、それらがともに途中で西鶴が放棄した作品の草稿であったことを思えば、おそらく不満を覚えたと考える方が自然であろう。

一方、「織留」三〇六は、どのような作品の草稿として残されていたのであろうか。

一見それは、全体が「世の人心」のためのものであったとも考えられ、問題はなさそうである。が、すでに引用したように、野間氏らの疑問が出されており、これまで問題にして来たように団水の序や「織留」の副題などがもはや信用出来ないとすれば、やはり私なりの検討が必要とされるようである。

ところで、西鶴が、おそらく元禄二年以後のある時期に、「世の人心」という書名の作品を書こうとしたことは確実である。そして、それが、「織留」三〇六に収められていることもほぼ確実である。しかし、「織留」三〇六は、巻四の一以前と巻四の二以後とで一見明らかにその創作意図や主題を異にしている、と私は考える。まずその点から問題にして行こう。

巻三の一と巻四の一までの五章に近年の「世の人心」を面白おかしく書いて行こうとする姿勢が一貫していることは、一読明らかであり、それらが「世の人心」という書名の作品のために書かれた作品であること否定する論者はあるまい。ところで、この五章で西鶴は、近年の世の

人心をどのようなものとしてとらえようとしているであろうか。この五章に共通する一貫した世の人心への視点はないであろうか。

まず三の一「引手になびく狸祖母」で西鶴は、「近年人のありさまを見るに、いづれ愚なるはひとりもなし」という事例を強調し、「油断のならぬ人ごころや」といい、「さてもくうたての世や」という。又三の二「芸者は人をそしりの種」では、近年頽廢した諸芸の風調を批判し「さりとはかしこ過て、今うたての人心にはなれり」と結論している。三の二「色は当座の無分別」は、「世の人心何時となく替り行定め難し」というテーマを強調し、始末男が自らのさかしさを手代にしめそうとして遊里に行くことを契機として好色におぼれ破産するまでを具体化している。三の四「何にても知恵の振売」では、「近年は人の心さかしうなつて」と云い、知恵を振売するさかしすぎる男にもどうにもならぬのは銀の才覚と落ちをつけている。又、四の一「家主殿の鼻ばしら」においても、巧妙な会話を生かした話の展開のあとで、「さてもおそろしの人ごころや」と評して一章を閉じている。

以上のように「織留」巻三の一～巻四の一までの五章には、近年人がさかしくなりすぎた故に、油断がならず思えばおそろしい人心になったという西鶴の認識が表白され強調されている。その話題はまちまちであり共通するものはないが、世の人心を書こうとする姿勢の強調、及び、ややとぼけた云いぶりもなしとしなが世の人心がさかしく油断がならない時代になつたという視点は、共通していると見てよいであろう。

一方、巻四の二～巻六の四の九章には、それが「世の人心」という作

品のために書いたものという点を強調している部分、又は、巻三の一～巻四の一に見られるような「世の人心」への共通した認識が見られるだろうか。

もちろん「世の人心」「人心」の語を用いている部分は多い。それをまず一応抜き出してみよう。

- ①「伊勢は人にかしこき所を見せずして、皆利発なり。是ほどの人心にて……」（四の三）
- ②「大かた世の人の心、さのみかはらぬ物ぞかし」（同右）
- ③「今時の人心、ひとつも仏の道に叶ふ事あらず」（五の一）
- ④「其時／＼の人心、世に有時には定め難し」（六の一）
- ⑤「今慈悲の世の人の心ぞかし」（六の二）
- ⑥「夫婦の人の心さへかはらずは……」（六の三）
- ⑦「今の世の人心を見るに……」（六の四）
- ⑧「わづかの取付千貫目にする程の人心、よろしき極めなるべし」（同右）

右を見れば明らかのように、四の二、五の二、五の三の三章には、比較的長い作品であるにもかかわらず、「世の人心」「人心」の語が見られない。又、右の⑥の例は、「人心」についての西鶴の認識を書こうとしているというより、普通の文章の中でたまたま出て来たにすぎないことは明らかだから、六の三にもその語が含まれていないと見てよいであろう。巻三の一～巻四の一では、その作品の主題を強調するかのよう「人心」の語を強調していたように見られる西鶴が、巻四の二以後、九

章中四章でそれを用いていないのは、いささか不審である。

又、「人の心」「人心」などは、他の西鶴作品でも多用される語であるから、右の八例が四の二・六の四までで用いられていることにさ程の強調は見られないし、巻四の一までで多くは冒頭の部分や章末で用いられているが故にそれが印象的であるのに対し、そのような型で用いられているのは、④⑦⑧の例のみである。やや印象批評的であるが、もしこれらの九章が「世の人心」とされている作品の中に含まれていなければ、巻六の四以外は、「世の人心」という作品の一つといわなくとも通用するのではなからうか。

さらに、右の九章の中での「人心」への認識の表白は、巻四の一までに見られるような共通したもの、一貫したものが見られず、やや場当りにその話の内容に則して云われているようである。つまり、「世の人心」の一面を明確に共通のテーマで問題にして行こうとする姿勢がないのである。とは云ってももちろん、これらの章が「今の世の人心」をとりあげていない、などと私は云いたい訳ではない。西鶴にとって「一代男」以来の基本的な課題が今の世の人心の把握とそれをどう表現するかにあると考える私は、この九章のような書き方では、「世の人心」とわざわざ名づけた作品として書く意味がないはずだといいたいだけである。

が、以上のような点をとりあげただけでは、巻四の二以後の九章は、「世の人心」のために書かれたものではないのではないか、という、やや恣意的な疑問を呈するのみで終るであろう。この九章には、何か共通

したものはないだろうか。

まず考えられるのは、巻三の三、巻四の一などに見られるような小説として形象化して行こうとする姿勢がほとんど見られず、すこぶる随想的、随筆的だという点である。が、巻四の一以前の五章の中にも、巻三の二のような作品がある以上、この点からこの九章が巻四の一以前と別の創作意図を持って書かれているということは出来ないかもしれない。しかし、一応の共通点と見ることは許されるであろう。

次に、西鶴の随筆的な作品の例に多く見られるように、ストレートに話題が展開せず、その作中で描く登場人物のいる土地柄などについてもやや詳しくすぎる程触れている場合があるが、巻四の二以後は、そのいづれにおいても、何らかの職業にまつわる話題を各章の主な論点や素材としているという点で共通しているということである。今それらの点を具体的にみてみれば、

- 四の二―医者にまつわる話題を中心とした随想。
- 四の三―伊勢の茶屋女についての見聞。
- 五の一―信心の話から今の坊主の有様やそれについての批判。
- 五の二―下女などの女奉公人。
- 五の三―質屋の実相と質入れの諸相。
- 六の一―表題通り官女の移り気。
- 六の二―仲居女や腰元のあり様。
- 六の三―乳母、奉公の実態と乳母についての西鶴の論評。（注4）
- 六の四―手代についての論評。

以上のように、医者・茶屋女・坊主・女中・質屋・官女・仲居女・腰元・乳母・手代などをめぐって、各章それぞれに話を展開している。そして、一見直接的なつながりを持たないように見える部分も、何らかの意味で右の諸職につながりのある話題であることは、今仔細に検討を加えずとも一読明らかであろう。

これは何を意味するのであろうか。明らかに、「世の人心」であると云えない巻四の二以後が、すべて何かの職業にかかわる話題を中心にして話が展開されているという事実がここにあるのである。ということとは、巻四の一以前と巻四の二以後とは、西鶴の創作意図が異なっていると見るべきなのではないだろうか。

さらに、「世の人心」であることが明らかな巻三の四で伏見の里の衰微の様子を書き、又、巻五の三でも同様な記述を行なっているという点も問題である。というのは、西鶴は、その作品が短篇の類集であるが故に、一作品の中のバラエティを考えている場合が多く、三都以外をとりあげる場合、その土地を一作品の中では一度きりとりあげないのが普通だからである。又、常識的に見ても、一作中に一つの土地柄を書いた似たような文章を置こうとするとは考えられないであろう。（「永代蔵」が例外であり、それ故に問題がある点に関しては、前出拙稿「西鶴小説における成稿過程の一面」参照）

結局私は、以上によって、巻四の一までの五章だけが「世の人心」として西鶴によって書かれた作品であり、巻四の二以後の九章は、別の創作意図を持って書かれた作品の草稿が編入されたものだったと結論せざ

るをえない。

それでは、それはどのような創作意図をもって書かれた作品だったのだろうか。

前述の点からみれば、それは、さまざまな職業に対する実態を現在の段階でとらえなおし、随想風に批判・諷刺するといった意図によって書かれたものであろう。西鶴が身近で見聞しうる話柄を中心に、やや隠居親仁風の感概を加えつつ記述して描くその作品が、現存のもの以外にも書かれたかどうか、又、現存のもの以外でどのような職業をとりあげようとしていたかは定かでないが、それが当世諸職風俗批判的なものであったことは確かであろう。私は今、ここで「見聞談叢」の伝える西鶴作品の一つ「世上四民雛形」を思いうかべ、それに擬したいようにも考えるが、そこまで云うと、余りの憶測という批判をまぬかれないかもしれない。（「見聞談叢」が「織留」三の二を引用しているのは周知である。しかし、伊藤梅宇がそれを引用し、「世上四民雛形」の名をあげているにもかかわらず巻三の二をそれからの引用であると断っていないということは、巻三の二が「世上四民雛形」の中に含まれていなかったという証拠とも考えられ本稿の論旨にあうことになるが、これ又我田引水ということになるかもしれない。）

以上によって私は、「織留」巻三・六が、「世の人心」の草稿五章、当世諸職風俗批判的な作品の草稿九章をとりあわせることによって編成されたものと結論しておきたい。（注5）

又、西鶴が、それら二つの作品を何故途中で放棄したかに関して、病

気その他の肉体的要因以外の理由も考えられると思うが、その点に関しては、この時点で、「世の人心」というテーマを設定すること自体が西鶴に何をもたらしたかという問題をとりあげ、「胸算用」成立の意味をといなおそうと予定している次章以下でとりあげることとしたい。

結局私は、「甚忍記」の残りの草稿が六（一七）章、「町人鑑」の草稿が二（一三）章、「世の人心」の草稿が五章、当世諸職風俗批判的な作品の草稿が九章という風に、四系統の、西鶴が途中を書くことをやめた未完の四作品の草稿をとりあわせたものが「西鶴織留」ではなかったかと考える。そして、それは、冷静にそれを観察すれば、そのような様相を呈している。

であるにもかかわらず、団水は「織留」が「本朝町人鑑」「世の人心」の二部を合せたものであり、それらが「永代蔵」とあわせて「三部の書」である、などという。それは何故か。

答はもはや明らかである。今出刊しようとする作品に権威を与え、その売れ行きを増そうとしてであることは云うまでもあるまい。とりわけ「町人鑑」という書名は俗うけしそうであるし、「世の人心」も又、西鶴が書くのにふさわしい書名である。とりわけ後者は、西鶴の随想風の作品であれば、どんなものでもあてはまりそうである。おそらく四系統の草稿の中からこの二作品の書名を採用したのは成功であった。それは後々までの「織留」の売れ行きが証明するであろう。

しかし、既述のように、西鶴は「町人鑑」と「世の人心」とを、わず

かの章を書くのみで中絶している。とすれば、「町人鑑」や「世の人心」でない作品を、団水の序や編集の型を信じて、「町人鑑」・「世の人心」として考えて割り切ることとはもはや許されないであろう。又、病中であったと推定される西鶴が、さまざまな作品を書こうとしていたと見定めることは、必ずしも西鶴にとって不名誉ではなく、むしろその意欲を評価すべきであろう。と同時に、「町人鑑」「世の人心」をわずかの章を書くのみで中絶し他の作品への意欲を持っていたと推定することは、その模索の過程をより具体的にさぐることによって、「胸算用」の成立という問題に一つの照明を投げかけることにもなるであろう。

が、団水が云っているとして、西鶴の町人物三部作説を云う通説への疑惑を投げかけ続けて来た本章は、もはや「胸算用」にまで及ぶ必要はないかもしれない。ここでは、団水の暗示にかけられることなく、「織留」を見直すべきだと強調しておけば十分である。私は、その団水の暗示をふり切った時に生まれるいくつかの批評的な問題については、次章以下で論ずることにしたいと思う。

が、本章の最初の問題の結論がまだ出ていない。はたして「永代蔵」「町人鑑」「世の人心」を「三部の書」と「名付」けたのは誰であるか。

正直に云って、以上の論述によっても、西鶴がわずかとはいえ「町人鑑」と「世の人心」のための作品を書いていることが明らかである以上、「三部の書」と称したのが西鶴ではなかった、ということは出来な

い。しかし、わずかな分量を書くだけで中絶し、他の系統の作品をも数々試みようとしている西鶴が、この二書のみをとりたてて「永代蔵」と並列させ、「三部の書」などごとごとしく称するであらうか。確かに、「永代蔵」の好評に依えて気をよくした西鶴が、書肆にその続編的な作品を要請され、自分でも書く気になったということはありえたかもしれない。しかし、「永代蔵」の続編たるものが「町人鑑」であったにしろ、それをわずかに二、三章書くだけで中絶しておいて、それを含めて「三部の書」などと西鶴が名付けるはずがないと考える方が穏当なのではあるまいか。

私は、「三部の書」と「名付」けたのは、おそらく団水だったのではないかと考える。他に名付けうる人物を考えられないからである。そして、「名付く」の主語をあえて明らかにせぬ不明確な文体によって、それが西鶴によって名付けられたもの、あるいは、前述のように、今始めて出刊される作品である以上そのようなことはありえぬのに、世間でそうよばれているものと読者に錯覚させようとしているのではないかと考える。

私は、団水の俳諧や浮世草子が、それ程すぐれているとは思はない。が、コピーライターの才能だけは、その小説や俳諧の才能に比して、抜群にすぐれていたのではないか、といった皮肉な感想を今持っている。近世における「織留」の好評がその序のみによっているとは思えぬが、その見事な役割は、それがこれまでほとんど疑われることなく、通説化されて来たという事実に徴しても明らかである。その不明確・不透明な

文体の序を深読みして団水のコピーライターの才能を論ずるのは、私の買いかぶりにすぎないのだろうか。

以上で、確証と称すべきものがほとんどなく、云えば云える、という型の推定と仮説をえんえんと積み重ねて来た本章を終る。確証を求め実証を尊ぶ昨今の西鶴研究の風潮に対してやや意識的に反抗してみることが意図して書いた本章に、「織留」を見直して行くための問題提起の意味が、いささかでもあれば、ということを中心期待し、これが机上の空論と嘲笑されるのみに終らぬことを願うばかりである。(1976・2・6)

注1 周知のように「織留」には、団水の序とともに、「世の人心」のために書いたと思われる西鶴の序が巻頭に掲載されている。それについては現在偽作説もあり、問題の多い序でもあるので、その点について触れつつ西鶴序及び西鶴作品に見られる創作意図と団水のとらえ方とのずれを論ずるのは、第四章以下にする予定である。

注2 もちろん「一代男」以外非西鶴作品とする森銑三氏は別である。しかし、森氏の考え方について今触れることはしない。又、後述のように、現在まで出刊されている「織留」の口語訳は、その口語訳のみ読めばこの「名づく」の主語を西鶴として訳しているとは考えられない。が、訳者がそこから問題を提起しようとし

ているとは見うけられないから、その訳者たちが「三部の書」という西鶴の意図を疑おうとしていると見ることは出来ないであろう。

注3 古典日本文学全集『井原西鶴集下』（筑摩書房刊）

注4 これまでの諸注で指摘されているように、この章は巻六の二の「いきとせ生るもの、子に迷はざるは一人もなし」以下であったはずであり、編者の誤りがこの部分にあることは確実であるから、今は、「いきとせ生るもの…」以下を巻六の三と考えておく。

注5 当然ここで「織留」の西鶴序についても、それがどの時点で書かれたか等の触れなければならない問題があるが、その点については、注1で記したように、次章以下でとりあげることとする。